口腔の役割

探検家リビングストン

デイビッド・リビングストンは 1813 年、イギリスのスコットランドに生まれました。家は貧しく 10 歳で町の紡績工場に働きに出ました。早朝から夜までの辛い勤めでしたが、リビングストン少年はわずかの時間をみつけて、独学でラテン語やギリシャ語を勉強し、聖書や科学、旅行の本までたくさん読みました。23 歳になり、それまで貯めたお金でグラスゴー大学に入り、医学と神学を学びました。宣教師の資格を得た彼は 26 歳で南アフリカに向かって出発しました。そして 1873 年、60 歳でマラリアで病死するまで、実に 30 余年間、原住民への医療と宣教、天体観測による測量術を利用した正確な地図の作成、そして当時「暗黒大陸」とよばれていたアフリカの奴隷解放へ向けて生涯を捧げました。

この探検は灼熱の風土に加え、飢餓や疫病、猛獣、奴隷商人たちからの暗殺の危機を何度も乗り越えて達成されたと言われています。中でも探検開始から 3 年目、野生のライオンに襲われ、左肩を噛み付かれてなぎ倒されたという有名なエピソードがあります。その時の状況を、のちに彼はこう書いています。「鼠（ねずみ）は猫に噛み付かれると気を失う。私はそのような状態であった。何がおこっているかははっきりわかっていたが、痛くも恐ろしくもなかった。ちょうど麻酔をかけられた病人が、手術の有様を承知していながら、メスの痛みを感じないのと同じである。」

重症を負い、治癒してからもついに左腕が肩から上へあげることが出来なかったと言われていますが、死後、その傷は彼を識別する身体的な証拠となったそうです。

このように体に傷害を受けて痛みが生じた時、それに立ち向かおうとするポジティブな生体反応が生じることがあります。そのような場面で痛みを抑え、痛いことさえ忘れさせるのは、体内で分泌され、強力な鎮痛効果を発揮するモルヒネに似た、「β-エンドルフィン」や「カンナビノイド」などの脳内麻薬様物質といわれます。麻薬様物質はその他、至福、陶酔、多幸などの快感を生じさせ、癖にする作用があります。痛みを生じた時、体内に麻薬様物質が増えますが、我慢できる程度の痛みが繰り返し与えられると、このような魔力のとりこになってしまいます。別の言葉では「やみつき」ということになります。マラソン走者の「ランナーズハイ」は良く知られていますが、「おいしいもの」を食べても同じことが起こります。たとえばヒトの舌にとって、痛くて刺激のあるはずの唐辛子の辛みの主成分カプサイシンのような香辛料は、ますます美味しく感じさせ、「やみつき」にさせてしまうのです。そしてより強い快感を求めて、中辛、辛口からさらに激辛へとエスカレートさせる作用があるのです。

ところでテレビのドキュメンタリー番組で、時々ライオンなどの肉食動物が獲物を捕え、がぶりと草食動物の首に噛み付くシーンを目にすることがあります。もしかしたら草食動物はこの時、痛みを感じてないのではないでしょうか。いやむしろ自然の摂理として快感であって欲しいと願います。

さて、読書の秋です。ここは少しゲームやスマートフォンから離れ、偉人たちの伝記を読んでみてはどうでしょうか。きっといろいろな事を考えさせられるはずです。

(写真)
「講談社の絵本 42　リビングストン　アフリカ探検」
昭和 28 年　株式会社　大日本雄弁会講談社
桐生市立図書館では株式会社講談社の創業者である野間清治が桐生市出身であることから昭和 54 年から毎年たくさんの本が寄贈され、「野間文庫」として蔵書されています
桐生市立図書館
http://www.city.kiryu.lg.jp/shisetsu/bunka/library/1006423/1012530.html

〈参考〉
よくわかる科学史Ⅲ　リビングストン（アフリカ内陸探検１）
http://ktymtskz.my.coocan.jp/S/kouro/land3.htm

美味の構造　なぜ「おいしい」のか　　山本　隆　　講談社メチエ　2001

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】